大槻玄沢と長崎浩斎

――蘭学、その江戸と北陸――

片桐一男

長崎家（高岡市）の資料は、長崎家各代の蒐集にかかる、豊かな資料群を形成している。

1　未刊・既刊の医書　約二〇〇点（浩斎蒐集蘭方医書多数を含む）

2　来翰のうちでは大槻玄沢書翰が光彩を放っている。玄沢書翰がこれほどまとまって発見・解読・紹介されたことはない。一大新資料群である。その話題は多岐にわたり、蘭学界を中心とする、江戸と北陸の動向・交流は注目に値する。蘭学塾における師弟関係、江戸と地方、などを考察する好例となり得る。

3　長崎浩斎の江戸遊学関係資料、その後の著書・備忘記事は、蘭学書生がみせる江戸遊学の実況と、その後出身地に戻ってからの成果・発展の具体的好例といい得る。芝蘭堂と天真楼という、江戸蘭学界の中心的蘭学塾における人的関係・教科内容・その程度と進度など、具体的に語っていて注目に値する。

4　『蘭学事始』『蘭東事始』をめぐる問題をはじめとする諸問題に対する新事実の証言も多く含まれている。

※詳細なレジュメを準備しようとしたら、一書を成すにいたった。大会当日までに次の書の刊行を予定している。主要資料を収録、往復書翰の全部を解読・解説して収載、スライドにかわる写真・挿図も多く掲載しておいた。手にして、お聞きいただければ幸いである。

『蘭学、その江戸と北陸――大槻玄沢と長崎浩斎――』　思文閣出版　一九九三年五月刊

（青山学院大学）